

2020.9.1

現代俳句千葉

138号

巻頭エッセイ

時代を乗り越える

事務局長 羽村 美和子



新型コロナウイルス禍により、生活は大きく変わった。仕事はテレワーク、リモート会議、学校もオンライン授業など、新しい試みが始まった。俳句もネット句会や通信句会などが各所で行われている。

ネット句会は、最近では便利なシステムが開発されている。そのシステムへ登録すると、あとは自動的にやってくれる。投句も選評も適当にシャッフルし、開示してくれる。普段は句座を共にする事の出来ない遠方の人とも句会が出来る。なかなかの優れものだ。私が代表を務める「ペガサス」は通信句会となった。ネットで参加出来ない人の句稿などは入力し、プリントして郵送する。多少の労力は要るが、皆が嬉々として投句したり選評したりする様子が感じられ、嬉しかった。ただ、難点は意見が一方通行であることだ。決して論が交わることはない。それはネット句会も同じだ。

ところがこの度オンライン句会も登場し、若者にはかなりの人気だ。ネット上で顔を合わせて双方向で意見が出し合える。先ほどの難点は

克服出来る。若者の句会離れが問題になって久しいが、SNS上で「いいね」が貰えればそれでよく、他者の批評は不要だと考えている人が多いとか。オンラインのツールに惹かれて、乗り換えてくれる可能性はないだろうか。

一方で、今まで句座を囲みその座だけに通用する価値観を、時には上意下達型で受け継いできた俳句も俳句界も、大きく変貌しなければならぬ。幅広い価値観の認識と構築が重要だ。まさに多様性が求められる。若者を取り込むことが出来ない文芸は滅ぶと、ある人が書いていた。

確かに批評は怖い。しかし作品をさらすことでしか文芸は成立しない。文芸は時代と共にあるが、時代を乗り越える力も必要だ。

ある歌舞伎役者が、千年後に歌舞伎があるとするれば「あの時代の人には舞台でやっていったんだ！」と言うほどの進化を遂げたい、と話していたのが印象的だ。コロナ禍を機に、これからの俳句や句会のあり方も否が応でも変わっていくしかない。進化する俳句、進化する俳句界であって欲しいと願う。

目次

時代を乗り越える 羽村美和子	1
『千葉県現代俳句集成二〇二〇』	
刊行に寄せて	2～3
諸家近詠	4～7
会員・会友の近況	4
秋の吟行会・令和3年度俳句大会案内	5
私の感銘句	8～11
津田沼研究句会報告	12
青葉研究句会報告	12
柏研究句会報告	12～13
君津研究句会報告	13
ひろば・図書紹介・掲示板	13～14

千葉県現代俳句協会会報

『千葉県現代俳句集成二〇二〇』 刊行に寄せて

神奈川県現代俳句協会

事務局長 芳賀陽子

この度は千葉県現代俳句協会創立四十周年をおめでとうございます。また、創立四十周年を記念した『千葉県現代俳句集成二〇二〇』のご上梓、真におめでとうございます。そしてご恵送いただきありがとうございます。

新型コロナウイルスの影響で大変な中、立派な作品集を出されたことに、編集に携われた方々のご苦勞を感じ入りました。今後とも千葉県現代俳句協会の益々の発展と皆様方のご健康、ご活躍を陰ながら祈念しております。

左記に私の好きな句を揚げさせて頂き、お礼にかえさせて頂きたいと思います。

陽炎の骨あるように立ちにけり 秋尾 敏
 鮫鱈の自問自答の口残る 蛭名 節昌
 こおろぎの一夜越中おわら節 岡田 淑子
 原罪のなきさみしさのつばくらめ 塩野谷 仁
 転生の赤い椿がまた落ちる 清水 伶
 棲み古りて烏柄杓の花咲きぬ 高木 一恵
 人間を脱ぎ万緑のど真ん中 徳吉洋二郎
 海女四人寄れば耳まで笑いけり 並木 邑人
 大白鳥空の動悸が止まらない 羽村美和子
 斑雪父ちゃんはまだ死んどらさかぬ 檜垣 梧樓
 必要なものは何となくある冬に 松崎あきら
 三月の雨の匂いの猫帰る 森須 蘭
 悪妻に時効などなしけむり茸 山中 葛子

群馬県現代俳句協会

副会長 堀越胡流

本日は「千葉県現代俳句集成二〇二〇」をご恵贈賜りありがとうございます。立派な本で、会員の皆様の励みになることでしょう。群馬も何かしなければと焦るばかりです。

千葉県俳句作家協会

事務局長 加藤峰子

この度は現代俳句協会設立四十周年記念号「千葉県現代俳句集成二〇二〇」のご上梓、まことに誠におめでとうございます。

十年ごとに刊行とのこと、編集にも大変なご苦勞がございましたことと拝察しております。貴協会のますますのご発展心よりお祈り申しあげます。

(以上戴いた書簡より転載。以下は現俳千葉会員の声)

渡辺 澄

二〇二〇年という年をどう総括させるのか。コロナ禍による日々の自粛生活の中で考えるのは、当り前の日常は夢であったのか、とい

うことであった。もうむかしには戻れないまま「新しい日常」を目指すことになるのだろうか。そして俳句はこれからも私たちと共にあるのだろうか。

家に籠ると決めてから届いた合同句集は、何よりの天からのおくりもの。このご世時によくぞ冷静に対処してくださったものと、高木一恵刊行委員長をはじめとした皆さまのご尽力に感謝です。表紙の図柄にすでに文学の香りのする格調があり、やさしさとつよさを感じました。

また当協会から、「現代俳句協会賞」三名と、「年度作品賞」一名を輩出していることに目を見張ります。

○武田 伸一 (第54回)

声に出せば兜太師遠し茄子の馬

○塩野谷 仁 (第62回)

遠野へ行きたし竹馬で行きたし

○清水 伶 (第73回)

てのひらに天網はあり冬すみれ

○長井 寛 (第17回年度賞)

東向くひまわり西向く荒凡夫

『二〇二〇合同句集集成』より抄出。

○二〇二〇年、この時代の暗さの中に前会長秋尾敏氏の協会賞受賞のニュースが、私たちの千葉に希望の光となって飛び込んできました。一同喜びに沸いているところです。

学校の柳が髪をふりみだす

冬深む秘すれば暗くなる旅路

忘れないための消しゴム原爆忌

一等の子が振り返る秋の空

夏の雨象は鯨を恋しがる

秋尾敏句集『ふりみだす』より抄出。

佐藤 映 二

先ず、「協会のおゆみ」に見る営々たる諸活動や往来のあった人々のお名前からだけでも、その足跡の大きさと確かさが想像できました。合同句集への応募は今回が初めてでしたので、過去三十年間に出した三句集より厳選して二十句を提出しました。

すでに交流のある方はもちろんのこと、各会員各位の力詠から、今後さまざまの示唆と啓発を受ける機会に恵まれますことを確信します。これからもコロナ時代の空気を共有せざるを得ない日々が続きますが、役員はじめ関係者のすべての方々のご多幸をお祈りします。

千葉 信子

「文学というものは、ある状況下での人の生き方とその内面を書き残すことを使命としている」と秋尾敏氏はあいさつに書かれている。例えば加藤楸邨の「火の奥に牡丹崩るるさまを見つ」は、戦時中空爆で家が焼け落ちる一瞬を詠んだ句だが、慟哭や励まし句ではない。楸邨の内面に生じた透徹な描写である。合同句集は「内面を書き残す」ことに心血を注いだ句ばかりだった。心に残った句は、
毒茸なり暗雲を払いしは 秋尾 敏
新巻の縄に噛みつく外はなし 相原 一枝
桃のかたちにフクシマの桃あらふ 川又 優
根ではない脚だ青嶺に押し出して 高木 一恵
足跡は君と重ねる寒雀 高遠 朱音

市川 唯子

合同句集に参加して今、感謝するばかり。実はコロナ禍リスク大の家族への心配が、私の現在地なのだ。俳句への怠りの日々になしい本からの刺激が嬉しい。先ず甘やかな印象の装幀に惹かれ、あとがきにてデザイン由来を識つた。なお大切な一冊となる。

畏れ多き俳人のお名前にたじろいだり、作品は元よりタイトルの個なる妙の魅力。次にはじっくりと読む。伏せたり開いたりの手触りから緩やかな時間が流れる。そして不安なき私へと戻りゆく。巡り続けたい一冊の世界に思い出すことがある。読書中の涙。無意識に感受するゆえの明るい涙である。様々な俳句から戴けるちよつぱり強い涙をもう一度。

無 子

創立四十周年記念行事の柱として千葉現俳四冊目の合同句集刊行をまずはお祝い申し上げます。三十周年大会は東日本大震災、そして今回は新型コロナウイルス禍、言葉にもなりません。だからこそ心の拠り所として俳句の果たす役割は大きいものと信じます。私事です。次女の死、長女の流産と続き、それを乗り越えるべく次の十年に向け言葉を紡いでいこうと決意を新たにするところです。会員数の推移においては昭和五十五年に六十二名から始まり平成十二年には会員・会友が五百人を超え、現在は縮小傾向にあるものの、子育てや仕事に一段落したバブル世代がいずれ参入してくると大いに期待しています。

中嶋 三雄

「現代俳句千葉」四十周年、おめでとうございませう。この度は『千葉県現代俳句集成二〇二〇』に参加させて頂き、深く感謝申し上げます。

思えば、芭蕉は「奥の細道」で、私の生家のごく近くを通過しています（福井城下）。私の懐郷と芭蕉の世界が交差するところ。また現住の千葉県には、一茶が度々脚を運び、私の身辺にも記念館があり、句碑なども多く見かけます。

こうした縁に思いを馳せて、私なりに俳句と向き合っています。そのための願ってもない糧としてこの『集成』を読み込んで行きたい、と思っています。

松本 千花

初めての合同句集への参加。自作二十句を発表することも初めてのことでした。拙い句ばかりですが、自分らしさの出ている句を並べたつもりです。

落ち着いた菜の花の表紙をめくると、俳句を心の糧に、丁寧に暮らしている人々の思いが溢れて来ます。お世話になっている方々。お名前は存じ上げている方々。そして多くの「はじめまして」の方々。略歴と合わせ作品を味わえることは、とても有意義なこと。これからの自分の俳句への指針にもなりそうです。大切にしたいと思えます。

諸家近詠

坂本千恵子

初夢や翼になった二本杖
 畔焼いて棚田の輪郭浮き上がる
 廃校となる卒業歌窓も泣く
 喇叭水仙叫びたきこと数あれど
 雪柳柔順のみでは生きられぬ

石井紀美子

北口に春が来ている待っている
 おぼろ夜のあぶない記憶の中にいる
 投合の愛の餌や山笑う
 東京湾大夕焼を吸い尽くす
 菜の花の奥より復興縄電車

飯島 昭子

立春やいつもの道を変へてみる
 笹鳴や肩の力を少し抜く
 被災地に祈りの雨や春の虹
 首都圏は桜隠しとなりけり
 ドライブの花のトンネル人気なし

森井美恵子

花冷えはシュークリームの中みたい
 パーカーのフードに残る春愁
 トレモ口となり満天星の花となり
 葉の下の八重九重のさくらかな
 苺のケーキセロファンは取りしまま

安念 俊彦

四月入り坊主刈りする医師ふゆる
 十字路にヒ蟻一匹迷ひけり
 園庭を黒猫かける子供の日
 悪役の役者の訃報四月尽
 雷近し信号はまだ赤ドット

森須 蘭

大枯野肺の裏側乾ききる
 瞬きをふっと追い越す冬の蝶
 蝶々のリズムで日向出来上がる
 棒高跳びの棒撓りきり蝶生る
 家族写真どっさり春の総集編

横須賀洋子

冬の月ひとつ臓器を奉る
 立春大吉毎日まいにち地動説
 雛まつり子供が帰ったあとからは
 神かけて孤独死ではない梅一輪
 まだ散らずなんと哀しい春だろう

山中 葛子

春の別れ乳房のようなマスクたち
 みむらさき人に生まれて人を待つ
 ちぢむ肉体マスクの掛かりにくい耳
 浅蜷貝水から水へひきこもり
 はらはらと竹皮を脱ぐ自肅かな

吉岡 一三

赤・黒・黄色チューリップみな兄弟だ
 吾輩は恋猫であるまだ八十
 走り根を踏んで地虫を絞り出す
 よそ見して風に乗る蝶今日のノート
 春風と見えぬウイルスごっちゃませ

門谷 杜人

海市への方舟を待つ老人A
 いっぱんの釘に影ある春の昼
 六道を馥郁と散るさくらさくら
 野十郎の「蠟燭」逼る緑の夜
 山側の青のなかから青蛙

《会員・会友の近況》

- ・目出度いことも。曾孫が今夏中に二人生まれまます。忙しさが増し、俳句どころではなくなるのは困りますね。(伊藤 希眸)
- ・梅雨半ばで静かな日々。コロナ騒動で子も孫も来ませんし出られません。そんな中、編集の皆様有難うございます。(菊池 和子)
- ・六月からやっと句会や体操、週一のポランテア、友人たちとの交流が復活。普通のことが出るのが、こんなにも新鮮だった幸福感に気が付きました。(岩岡 方子)
- ・折角戴いた命、日々大切にして生きて行きます。俳句は生き甲斐です。(久保 筑峯)
- ・コロナ禍、はたまた豪雨災害の各地。列島は、辛い日々が続いております。編集部の皆様のご尽力に感謝。(栗山美津子)
- ・コロナ禍で月に三つの句会休会中ですが、通信句会二つに参加。皆に会えないのは残念ですが、通信句会が出来るだけでも良しと思ひ俳句を楽しんでいます。(蛭名 節昌)
- ・青葉俳句一〇七回目を迎え、君津俳句一回目が始まりました。千葉現俳役務の皆様にご感謝。現俳を愛する者として。(加藤 法子)
- ・コロナウイルスで自肅中の作。八十葉やステイホームを守りけり。(川又 優)
- ・近所の里山、谷津田を巡り歩いていて。散在するお寺さんも無住。アライグマやハクビシンさらにイノシシだらけ、谷津の移ろう四季には沢山の生物が息づく。どんどん消えていく里山にどんどん経済優先の地域。里山との共存社会は難しい。(北野 耕太)
- ・今までは夢中。これからは新しきものを認識して句作に励みます。(河合 利枝)

関谷ひろ子

片言のローカル線に紋白蝶
花万朶目眩の対処聞いており
鉄骨の遮る遠嶺春北風
かけ引きもごまかしも無くつくしんぼ
風呂敷の包む好日桜東風

田村 隆雄

堆く芽吹く力を新刊書
水の星生命体としてみどり
繚乱とさくら瓦解の音をみる
若葉百彩ヒタミンCの雫
囀りの散らかしままの筑波峰

市川 唯子

薄氷鳥は少女をおもいだす
フラットシューズ寒月を沁みて逢う
諍いになれば踵をバナナジュレ
子猫棲みつき弦楽器は壊る
いのち尽くして青梅の泥だらけ

片岡 秀樹

金魚浮き太宰治は水死せり
伴天連の呪文蠕く金魚玉
花魁の如き金魚と目が合いぬ
金魚浮き蜷川実花の吐息かな
カクテルパーティー金魚悪口のみを聴き

伊藤 希眸

朧夜のどこか重たし燈一つ
街を守る鉄塔の列聖五月
刀身は桐箱の中梅雨きざす
あぢさゐは残像といふさう思ふ
夕空へ糸伝ふごと螢とぶ

岡田 春人

水が呼ぶ滝を見るため手をつなぐ
春の雨水の重さをはかる枝
大西日湖の水面の歩けさう
蛭飛ぶいのちをつなぐともしかな
桑の実や愛称で呼びあふ二人

菊池 和子

梅雨の川何をのせるか泥の舟
静かな日々蟻のクシヤミが聞こえそう
庭手いれシャンパンブルーの芋虫蹴く
カンナ燃ゆマチスの赤はどこにある
天の川あの日の君は待つてるか

黒澤 雅代

夏シャツに皺どこまでも戦中派
言葉にも後ろ髪あり風の盆
無花果の裂けて歳月ざわざわす
黙りひとつの主張寒の鯉
過不足のなくて野菊のままにいる

上野 紫泉

ねぢ花の半回転や明日も暇
ソーダ水千のひかりをとどここめる
自由とは退屈虎が雨降り続く
目礼や言葉ひらひら夏の蝶
著莪の花この道浄土の供花となれ

浦野 五郎

千羽鶴はドームと朽ちて夾竹桃
夕風や活断層に横坐り
父の倍生きて至らず夕端居
さくらんぼぼのてんでんのやうな茎
天皇の透明傘や夏燕

◆秋の吟行会について

と き 令和二年十月二十九日(木)

と ころ 稲毛海浜公園

●さわやかな季節の吟行を楽しみましょう。
●いわゆる「三密」を避け、「ソーシャルディスタンス」を保ち、マスク、消毒を心がけます。長時間の句会形式をとらず、選句提出までとします。

●選句結果は、参加者全員に、郵送でお送りし、会報に掲載します。

●今回は欠席投句の機会を設けました。欠席投句の方は「申し込み用紙」と囁目二句の両方を十月十日までに担当まで、郵送でお送りください。

●吟行会参加も欠席投句の場合も申し込み後変更が生じた場合は、高橋まで一報くださいさるようお願いいたします。

◆令和三年度俳句大会について
と き 令和三年三月二十一日(日)

と ころ 千葉市文化センター

●コロナ禍で行動のままならぬ今こそ、たくさんの投句を期待します。

●会員・会友以外の方の投句、大歓迎。今回は新たに学生の皆さんに呼びかけています。学生の投句料、大会費用は無料とします。

●懇親会を予定していますが、コロナウイルスの動向に左右される側面があります。参加予定の皆さんと連絡をとっていきます。(以上 担当 高橋宗史)

諸家近詠

宇佐見房司

羊羹を少し厚目に春の宵
行く春や駅のピアノのノクターン
叶はねど旅恋しかり雲の峰
皆んなして葦笛吹きし梅雨晴間
運動会止めし校庭夏燕

片岡伊つ美

星とんで忘却といふ救ひかな
人の世の五欲を負へり秋の雲
身内てふ緩き繋がり石路の花
こんな日は徒然草と春を待つ
蝌蚪の紐わたしはわたしとは言へず

岩岡 方子

黒板は過去の伝達鳥帰る
春浅し木々に光の底力
梅雨晴間肩の力を抜く素足
きな臭い昭和の綴り蟬時雨
本気でうたう晩秋の三拍子

大見 充子

薄原分け入ればマンモスの背ナ
着脹れて羊でありし頃のこと
クリムトのいつもの女冷えにけり
シーソーの高いところの白鳥座
にび色の月を想えば平家琵琶

菊地 京子

断念のバツハ一夜の花ごろも
忘却の日時計に針のない桜花
あじさいの笑いの音符はひふへほ
暗い母音運河にひろう白秋忌
迫りくる百歳の飢餓冬ばたん

久野 康子

吹きはポエム浮草生い初むる
人と居て自分が見えぬ暮れの春
初蝶来はがきの麗の字がきれい
夢の路地まがり違えて葱の花
声明のあふれる白花さるすべり

久保 筑峯

縁側の昭和向きたる籐寝椅子
来し方を丸ごと齧る冬りんご
寒椿落花し色即是空かな
追懐の草行露宿鶉飼船
いくつ手を打たば落ち来る冬の星

石井 稔

ひとひねりしてあるバスタ春の宵
さくらさくら西暦で歳をとる
ジーンズの尻のポケット春愁
背景はときに透明梨の花
万愚節座席指定の映画館

栗山美津子

キック待つ背番号8風光る
孫といふ春の息吹をたまはりし
珈琲と銀ぶらが好き花椿
さくらんぼ食みて三十路の両えくぼ
観覧車降りてまた凍つ君の距離

蛭名 節昌

蟻地獄安息角をさかさまに
警官が来る山靴に触れて去る
氷菓溶ける晩年という形なり
青僧の眼の青し青葉木菟
鯉の目を眠らせ解夏の厨事

上杉 良身

千歳飴握りこれより一代記
潮溜り戻れぬ生地雪の下
救急車水煙上げて梅雨の駅
大根をかかあ天下の空に干す
春蟬や奥へ仏の御座すごと

小野 功

曖昧な返事ばかりひよんの笛
すつぴんの冬満月に魅せられて
転んでもこの道をゆく花吹雪
宇宙への近道はなし石鱗玉
梅雨出水大きな芥を肅正す

加倉井允子

向日葵の不安な明日という方位
白樺明日を思えば落ちきれず
敗戦忌抜いて青春語れない
敗戦忌虚ろなものに晶子の詩
悠久の流れを紡ぐ虹の紐

小野富美子

摺り足で来る春世界地図に傷
青蔦やぐらりと線量揭示板
句点無き晩年梅雨がやつと明け
小鳥来る伝言板の残る駅
今生の粗熟を取り蛇穴に

加藤 法子

梅を干し己が仕舞い方を忘る
月見草いまま砲台跡と呼ぶ
八月の凶事火の入る中華鍋
冬瓜の何もせんでもいい形
母はもう鶴折るばかり星月夜

川又 優

轉りや岸にふくらむ水明り
空港の車百台黄砂ふる
古戦場跡たかなの土を出る
日を浴びて音符のやうなさくらんば
姿よき秋刀魚のやうに寝てみたる

市川ふみを

ボケットのコインの重み梅雨湿り
竹皮を脱ぐ寡黙となりし反抗期
びしよ漏れがキラキラ光る子らの夏
雷渡り来る赤べこの首振れる
夏風邪をこじらせ老人装ふ

川上 典子

四月馬鹿私の耳は驢馬の耳
風水を信じて西にフリージア
蝸牛愚直であるという正義
小半時一切空や昼寝覚
許さぬでも許すでもなく水羊羹

北野 耕太

無人駅みんな見守るつばめの子
ねぶの花捨田に根づく雨の中
七変化活けて鼓動の鎮まりぬ
何処やらに声拾い合ふ夕河鹿
あのひとと何処かで交差夕ぼたる

大澤 重市

雪雫黒鍵かるきピアノニシモ
連発の異議ありの声花吹雪
梅一輪漢方葉のよさを知る
新入りは馬脚露す村芝居
棘と刺す言葉の重み夜の秋

小池美佐子

たんぽぽの散け思考の呆気なく
パイオニアの正体遙かキャベツの芯
暗転の小道具月の後向き
虎落笛一本の木のおノマトペ
クレヨンの桜尽くしに無縁仏

遠藤 寛子

手を腰に三つ装着サングラス
弁当の蓋で梅干し潰す朝
縮布敷く子らの寝姿軽快に
梅雨晴れてまた行く先はにわか池
夏の空干潟の蟹は皆笑う

岡田 信子

黄金虫返せ返せと泣く子かな
青梨や落ちてゴロゴロ肥沃の地
彼岸花墓に健在べきおぼけ
コロナ禍をもものともせず夕化粧
きねづかを集めて散らし天の川

河合 利枝

天赦日ここに在りける小春かな
金木犀知られたくなき在り所
租界地のありし武漢を思う弥生
嬰兒に言祝重ね五月晴
枯れて逝く後姿に燕来る

岩佐 久

るいるいと靴音ひびき春の雪
ぼた雪の気配濃厚大広野
忘れたきこといつつむつ八月来
寅さんと呼ばれる男九月足
川上に川下にまた霧ふかし

小河原清江

柳の葉を懐紙に添へて女正月
カレル橋聖人像の手に氷柱
受験終え少年少女明日へ羽化
余生とはまだある未来半夏生
夕星や子に炊きて待つ零余子飯

興津 恭子

貨幣史をたどる列柱街灼ける
麻酔効くまでの夏雲ダリの髭
船が曳く平和の祈り八月よ
鋭角に夏の残照私小説
祈りの鐘丘に傾れて鱗雲

金子 未完

犬吠のヤコブの梯子初御空
陽炎える街は空つば伽藍堂
科学者は子どもまなこ蝸牛
凶解して何が解るか雑木紅葉
お城ごと絶えし一族菊人形

内田 庵茂

ウイルスの出処に諸説よなぐもり
行く春やこゑ出して読む方丈記
出歩かぬことが安全亀鳴けり
点滴の変らぬテンポ夏至の夜
ナスコールを押すにためらひ梅雨の月

岡田 淑子

向日葵の芯の三密ゴッホ展
まだ鶏になれず夕陽の葉鶏頭
小松座の半券はらり兜太亡し
煙突はひとり者です急に秋
へヤピンを落しておりぬ蟻地獄

私の感銘句

日野 葉子

着て脱いで梅雨の機嫌に逆らわず
音の無い山里暮らし胡桃割る
うららかやしがらみ抜ける観覧車
十二月駅を背にして家路あり
雨過ぎし光の春に嬰生まる
名草の芽それぞれの彩夢に満ち
枇杷たわわ寛容にしてとらわれず
風薫るトガの踊り子靴を脱ぐ
忘却のための刻あり酔芙蓉
漫歩の秋顛沛おそれ付き添わる

保坂 末子

捨てられる者に紛れて浮いて来い
花満開どこで息つぎ入れようか
雪の夜の起き臥し骨を悲します
終活に賛否両論花は葉に
こどもの日遠くに飢えと戦いと
鯉幟否定も依存も無く泳ぐ
百咲いて百の静寂野の辛夷
両腕の長さ異なる昼寝覚
黒日傘セシウム少し浴びてくる
鳳仙花弾け火種となる予感

坂本千恵子

引くたびに遠さかりゆく毛糸玉
晩節のほころびを縫う夜長かな
心音を聴く妊婦さん花の昼
円周率伸ばす花菜の海の風

作者名 号頁

廣瀬 梯子	132	2
三浦 侃	132	2
若林 佐嗣	133	7
渡辺 澄	133	7
飯島 昭子	133	8
新井 秋芳	134	4
小野 功	134	4
佐々木幸子	134	7
高橋 健文	135	11
武田 和郎	135	11
藤田 守啓	132	4
星野 一恵	132	4
山崎 政江	132	4
青木 一夫	134	4
岡田 春人	134	4
椎名 鳳人	134	5
加倉井允子	134	6
内田 庵茂	134	7
木之下みゆき	135	10
千葉 智司	135	12
馬淵 津枝	132	3
森 孝子	132	3
秋谷 菊野	133	8
石井紀美子	133	8

可憐^{あたら}夜の金魚売なら従いてゆく
コンピナートの深き錆色晩夏光
人の名の咄嗟に消えて冴え返る
さびしさの入れ物がない枯野ゆく
掌につつまレモンひよこに変わりそう
利久忌や涙ににたる茶杓かな
利久忌や涙ににたる茶杓かな
茶道家であつた方が体調を崩されて茶道をや
められた寂寥感はとても深いと思われます。
愛用されていた道具のひとつ「茶杓」に心を
寄せられ、御自身の来し方を見つめておられる
句に感動しました。

私自身も還暦を迎えた折に色々な趣味を心掛
けましたが、六年ほど前より、体調不良を機に
全てをあきらめました。その時の無念さが作者
の御句に深く重なり感銘いたしました。

田端 重彦

木道は歩荷優先水芭蕉
初夢の夢の中にも夢があり
ものの芽のひとつひとつに語りかけ
大志には大小ありて木の実熟る
すてられし故郷の田よ山桜
それなりの咲き方もあり老桜
彼の世でも反戦兜太早星
難民の子らに聖夜の一冊を
兜太忌や山齡一つ加えたり
逃げ道を知らぬ少年雲の峰
兜太忌や山齡一つ加えたり
掲句の山齡は秩父連山、私も登山した鋸型の
両神山ではないかと想像する。作者は金子兜太

主宰の「海程」で第五十一回海程賞を受賞され
た兜太氏の愛弟子。当協会でも重責を担われ、四
句集を刊行されている。師が他界して二年、思
いは募るばかりであろう。日暮里の本行寺で毎
年開催される「一茶・山頭火俳句大会」で兜太
氏は平成二十九年まで九年間選者を務められて
いた。山頭火研究家の村上護氏との対談は五回
も続けられて好評だった。

石井紀美子

うす紙の向こう昭和の楳明り
冬の野の白いところで肺洗う
引くたびに遠さかりゆく毛糸玉
マスクして小さな神とすれ違う
夏富士の正面心療内科です
忘れた障子の穴に蝶を貼る
類想の葉ぼたん普通がむずかしい
かき氷こめかみ簪えはじめたり
さびしさの入れ物がない枯野ゆく
御器齧り 夜の人間探求派

黒澤 雅代

生き様はつきはぎだらけ秋の風
猿に夢全部食わせて卒業す
霧霧霧何事もまだ起こらざる
可憐^{あたら}夜の金魚売なら従いてゆく
類想の葉ぼたん普通がむずかしい
山鳩よ金柑のもう熟れるころ
夕焼けの神田西口獣道
短夜のトンネル長すぎてならぬ
キリンにも角あり遥かなる夏野
てのひらに夏蝶灯す遠忌かな

細根 栞	132	2
保坂 末子	132	3
馬淵 津枝	132	3
森 孝子	132	3
星野 一恵	132	4
山中 葛子	133	8
菊地 京子	134	4
久野 康子	134	5
小野 裕文	134	7
鈴木まんぼう	135	11
山崎 幸子	132	4
東 國人	133	8
山中 葛子	133	8
塩野谷 仁	134	4
菊地 京子	134	4
大見 充子	134	5
小林 実	134	5
久野 康子	134	5
高橋 健文	135	11
清水 伶	135	11

飯島 昭子

まだ明日があると思つて日向ぼこ
幼な日の小径におりぬ木の実手に
スキップの子らに弥生の土優し
チユリッぽどこか壊れてゆく日なり
世界史はおおかた戦史ききす鳴く
ねこじやらし揺れて帰らぬ人ばかり
貝風鈴昔のはなしきかせてよ
兵の骨敷くシベリアの花野かな
夕暮れを借りて広がる罌雲
終章といえど未完の花筏

徳吉洋一郎

秋のセル金釘流の生残り
病院に靴屋来てゐる冬の暮
冬枯れの芝草を踏む 痛いか
両の手のいつか前足桜冷え
田という田くちあけしまま借どき
鳴咽とも桜ふぶきのご真ん中
白いマフラープロペラの音がする
西口で待たされている青蛙
御器齧り 夜の間探求派
百年に一度の水に月の影
鳴咽とも桜ふぶきのご真ん中
あの桜ふぶきのご真ん中にて鳴咽(すすり
泣く)と言つている。桜は日本人にとつて最も
華やぎのある花であり、散り際は日本人の美意
識にマッチしていてその清さが武士に喩えられ
る。桜の散りざまは様々、人の散り際も然り。
作者はどちらを見ているのだろう。多分桜の持
つ両面を詠いたかつたに違いない。鳴咽とももの

「とも」がそれを伝えている。
良寛和尚の辞世の句(散る桜残る桜も散る桜)
がふと浮かんだ。

藤岡 尚子

着て脱いで梅雨の機嫌に逆らわず
空木こぼる誰にも逢はず峠越ゆ
ここから大切な人冬桜
どの石も影はみ仏寒の月
離農かな刈田に蒲団かけてゆく
春の鳥ごと売られゆく雑木山
千枚田思い思いに蛙住む
毎日が住所変更かたつむり
生涯のところでころをサングラス
ロボットノトモチイマス鳥雲に
空木こぼる誰にも逢はず峠越ゆ

一読、いいなあいいなあだった。誰にも逢は
ずの峠越えを、作者は淋しがつているのではな
く、一人を大いに楽しんでいらつしやるのだ。
天候の悪い時、夕闇の迫る頃、体調不良等であ
いなら一人もよし。青空の下、季語の「空木こ
ぼる」が優しい。得難い時間を得、素敵な句に
出会えた峠越えに乾杯!

高野 春子

冬枯れの芝草を踏む 痛いか
陽炎へ救急車消防車没す
学校へ行ききたかつた子卒業す
風車母に渡せばよく廻り
椿真つ赤ぼつと落ちたり指の麻痺
河童忌の日暮里駅で水を飲む

本棚に年月並ぶ梅雨ごもり
大仏の俯いてゐる残暑かな
大根播る四半世紀の片思い
返信は無用さんまは焼けており

富澤さち子

燕去る今日ことさらの空の蒼
雪や雪北のじよんから鳴り止まず
コーヒーのミルク目覚めるまでが寒
梅咲くや父いて父の父がいて
寒の雨ボールモーリア透きとおる
筆談の窓拭きクリスマスキャロル
十二月駅を背にして家路あり
夏菜莢を採りに来よという友夢に
脳内に桜しべ溢れレクイエム
茴香の花の畦なら逢いにゆく

河合 利枝

冬の虫革命の曲の駅ピアノ
みどり児の握力憲法記念の日
白鳥の野太き声よ曇天よ
うららかにしがらみ抜ける観覧車
忘れたい障子の穴に蝶を貼る
木洩れ日や首なし地蔵に百の耳
平凡な暮し貫く蝸牛
初秋や書棚の奥の旅心
冬薔薇よ誰のものでもないわたし
大根播る四半世紀の片思い
みどり児の握力憲法記念の日
生まれればかりの子供の握り拳。その子の一
生を握っている様で感動する。その拳でどの様

柳沢 純	132 3	廣瀬 悌子	132 2	上野 紫泉	135 10
森 孝子	132 3	沼山美津江	132 2	高橋由紀子	135 10
宇佐見房司	134 5	森村 文子	132 3	富澤ムツ子	135 12
越野 雄治	134 5	若林 佐嗣	133 7	富澤さち子	135 12
佐々木幸子	134 7	秋谷 菊野	133 8		
高橋由紀子	135 10	小野富美子	134 5		
鈴木 瑩子	135 11	遠藤 寛子	134 6		
鈴木 房州	135 11	岡田 淑子	134 6		
鈴木 隆史	135 12	鈴木 瑩子	135 11		
富澤さち子	135 12	玉山 政美	135 12		
		沼山美津江			
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		矢野 忠男	132 4		
		山崎 幸子	132 4		
		無 子	133 7		
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135 11		
		鈴木 まんぼう	135 11		
		白木 暢子	135 11		
		大見 充子	135 11		
		無 子			
		池田 博臣	133 8		
		石井紀美子	133 8		
		大見 充子	134 5		
		加藤 法子	134 6		
		鈴木 瑩子	135		

に荒波を振り払って生きて行くかと祈りとなる。「こども憲法」という本を昨年買った。自分の知らない時代を生きた子供を幸せに。柔らかな物と硬い物の取り合せと季語が利いている。

関谷ひろ子

駅伝に始まる日本初山河 浜名 儀一 132 2
 たけのこの皮をむきむきつい本音 元橋 孝之 132 2
 うぬぼれず自慢もせずに障子貼る 柳沢 純 132 3
 虚栗つじつま合はぬ恋をして 藤岡 尚子 132 3
 一葉落つ朴思い詰めたる感じ 田村 隆雄 132 4
 金魚の死転校生が泣いている 渡辺 澄 133 7
 永遠の欠席届鳥雲に 横須賀洋子 133 8
 葱坊主満員電車にいて一人 山中とみ子 133 8
 あめんぼう風を読んで飛ぶつもり 大澤 重市 134 7
 思考力色なき風にうばわれる 鈴木 郁子 135 12

中村 冬美

音の無い山里暮らし胡桃割る 三浦 侃 132 2
 みどり児の握力憲法記念の日 村田 珠子 132 3
 寒星を嵌め込んでる窓ひとつ 森須 蘭 132 4
 大白鳥管弦楽となつてゆく 東 國人 133 8
 花の寺白い満月それはそれは 山中 葛子 133 8
 永遠の欠席届鳥雲に 横須賀洋子 133 8
 陶かけら一乗谷の糸さくら 伊与田すみ 134 4
 信濃路に母衣の破れし敦盛草 川島 里子 134 7
 戦場へ行かず送らず立葵 小野 裕文 134 7
 風薫る泣いてるなんてもつたない 川上 典子 135 10

小多田文字

ひび割れた仁王の踵花ふぶく 半田 千枝 132 2
 山ひとつ据ゑる秋の無人駅 藤岡 尚子 132 3
 ぎりぎりの攻防桜の芽に譲る 三好美穂子 133 7

十二月駅を背にして家路あり 渡辺 澄 133 7
 農道を亀裂の走る大暑かな 秋葉 紅陽 133 7
 大志には大小ありて木の実熟る 山中 頼子 133 8
 侘助の開き切らぬは矜恃なり 大見 充子 134 5
 コンピナートの深き錆色晩夏光 重田 忠雄 134 5
 忘却のための刻あり醉芙蓉 高橋 健文 135 11
 人の和に突っ込んで来し熊ん蜂 鈴木まんぼう 135 11
 忘却のための刻あり醉芙蓉 高橋 健文 135 11

忘却とは如何なることを考えさせられる句である。作者はそれには刻があると云う。その刻たるものに醉芙蓉を重ねる。人は現象や物事を記憶し保持するがそれがどの様に忘れ去られていくのだろうか。わが家の醉芙蓉は初秋の早朝に八重の純白な花片を開く。本当に心が洗われる。昼頃には淡紅色となり夕方には紅色を増していく。夜には紅色となり翌朝になつてもしばまらず新しく咲いた純白の花を際立たせやがて落ち忘れ去られる。忘却には突然ではなくゆったりとした時間(刻)の流れを見る。本当に美しい忘却である。

鈴木まんぼう

遠き日の風に逢うまで草矢打つ 細根 栗 132 2
 戦争が鎮座するどぶ汁の底 東 國人 133 8
 永遠の欠席届鳥雲に 横須賀洋子 133 8
 風の木と風の黒牛明日は夏至 塩野谷 仁 134 4
 全員の敗けるあそびか夏が来る 小林 実 134 5
 墓出でて尤もらしく身構える 加藤 法子 134 6
 百歳は遠くて近し椎若葉 岡田 淑子 134 6
 たましいのはぐれたあたり芥子の花 下村 洋子 135 10
 来し方に水ゆきわたる蝸牛 高橋 健文 135 11

きぬかつぎ愛しからずや口の皺 高木 一恵 135 11
 なかもと淑子

たんぼばやすべての道はローマへと 吉野 精 133 7
 朧夜の散歩にわたすハンチング 横須賀洋子 133 8
 冬の流星ソリストの弦切れて 川嶋 悦子 134 4
 春の鳥ごと売られゆく雑木山 小野富美子 134 5
 風車母に渡せばよく廻り 越野 雄治 134 5
 寺町を冬の顔して男来る 岩崎 令子 134 6
 語り部も被爆者であり石路の花 神作 仁子 134 6
 やや金気帯びし井戸水終戦忌 内田 庵茂 134 7
 太陽の似合うトマトと長男と 田沼美智子 135 10
 烏瓜生きる力の足しにする 白木 暢子 135 11

栗山美津子

柚子風呂や都会にはなき真の闇 福原 郁 132 2
 どんぐりの落ちてきのふの増えてゆく 浜岡 紀子 132 2
 大寒や肺の深さを知る吐息 元橋 孝之 132 2
 すみれのようにマリリンモンロー揺れて 横須賀洋子 133 8
 春嵐武器を持たない風見鶏 岩岡 方子 134 4
 乱文のあじさい乱筆の告白 菊地 京子 134 4
 百合の瓶すらせばテーブルの広野 市川 唯子 134 7
 ゆたかなる馬の睫毛や明易し 佐々木幸子 134 7
 麦秋やメッシンが地球をリフティング 鈴木 房州 135 11
 饒舌のあとの渴きや緋のキャンナ 富澤ムツ子 135 12
 麦秋やメッシンが地球をリフティング 鈴木 房州

にわかファンなれどサッカー大好きな私には、とても嬉しく楽しい一句。そして豪快・力強さをも感じます。世界のトップ選手です。そして今まさに熟なる時：地球も麦秋も素敵ですわね!! 私もいつかイニエスタで詠ってみました。

中山 皓雪

晩節のほころびを縫う夜長かな
生き様はつきはぎだらけ秋の風
青き踏む若き兵士の征きし道
大志には大小ありて木の実熟る
かき氷こめかみ聳えはじめたり
青田見てすて田敷える帰郷かな
戦場へ行かず送らず立葵
三本の矢の的はずれ日脚伸ぶ
奴風不意に謀反の宙がえり
きぬかつぎ愛しからずや口の皺

馬場 馬子

返信は御自愛と書き風邪を引く
恋という微熱のかげら桜貝
どの石も影はみ仏寒の月
立つために手をつく釣瓶落しかな
初鏡妻には皺が見えてない
ひとりごとの別姓夫婦缶ビール
春の鳥ごと売られゆく雑木山
風薫る泣いてるなんてもつたいない
行水も昭和もそろりセピア色
花デイゴ人生忘れた姉に会う

吉田 耕史

被爆地の露草藍を憚らず
病院に靴屋来てゐる冬の暮
人生の山は透明枯葉舞う
厄除の寺に着くまで転ばない
継目なき月日よ空よさるすべり
少年は曲りたくなる胡瓜かな

森	孝子	132	3
山崎	幸子	132	4
渡辺	澄	133	7
山中	頼子	133	8
久野	康子	134	5
齋藤	溥子	134	6
小野	裕文	134	7
久保	筑峯	135	10
高橋	富久江	135	10
高木	一恵	135	11
柳本	ゆみ	132	3
水野	禮子	132	3
若林	佐嗣	133	7
渡辺	澄	133	7
岡田	春人	134	4
重田	忠雄	134	5
小野	富美子	134	5
川上	典子	135	10
上野	紫泉	135	10
田村	麗	135	12
野口	久	132	2
山崎	幸子	132	4
三須	民恵	132	4
藤田	守啓	132	4
山口	夕紀	132	4
田沼	美智子	135	10

掌につつむレモンひよこに変わりそう
忘却のための刻あり醉芙蓉
烏瓜生きる力の足しにする
兵の骨敷くシベリアの花野かな
兵の骨敷くシベリアの花野かな
鈴木 房州
鈴木 房州
昭和二十年八月九日の日ソ中立条約を破棄し
満州にソ連軍は侵攻し五十七万人を抑留し五万五
千人が亡くなっているシベリア。収容場によつては
埋葬が追いつかなかつた。現在でも墓標も建てられ
ず埋葬地が宅地や耕作地になつていふという。正
に兵の骨が敷かれ一年の半分は雪に覆われている
シベリアが花野にいる。

私の父もシベリアに七年間抑留され帰国した。
作者は抑留者で実体験の作か。人骨の上に咲く花
が何とも彼とも言いようがない。

田口 満代子

メレンゲの角もつたりと春よ来い
花の寺白い満月それはそれは
雨にすかんぼその先の雨に馬
ネモフィラの青い引力無人駅
父性とは鼻の鳴く距離であり
師の影を踏みてまた酔ふ夏の月
光速という破壊力草かげろう
削除キーを押へてよりの秋思かな
てのひらに夏蝶灯す遠忌かな
花芒なびけば仲間風仲間

山中 頼子

日は西に死は垂直に落椿
恋という微熱のかげら桜貝

高橋	富久江	135	10
高橋	健文	135	11
白木	暢子	135	11
鈴木	房州	135	11
鈴木	房州	135	11
松本	千花	132	4
山中	葛子	133	8
塩野	谷 仁	134	4
久野	康子	134	5
黒澤	雅代	134	7
久保	筑峯	135	10
木之下	みゆき	135	10
高橋	由紀子	135	10
清水	伶	135	11
高桑	婦美子	135	12
野口	久	132	2
水野	禮子	132	3

遮断機の下りて朧夜まっ二つ
老ふたり川霧一〇〇トンどう曳くか
むこう向く大ひまわりの黙秘権
彼の世でも反戦兜太早星
毎日が住所更かたつむり
狛犬の阿吽の口に春の雪
瀧き込まれた世の色返り花
鳳仙花弾け火種となる予感
むこう向く大ひまわりの黙秘権
小野 功
夏の陽がきらきら照りつける駅舎。ひときわ
目立つひまわりの花。しかも後むきで花の顔は
作者には見ることができませんが、夏の日差し
に負けまいとがんばっている姿に、作者は感動
したのでしょう。

私の住む家の近くに私鉄の無人駅があります。
駅を降りるたびにひまわりの声なき声に
励まされます。むこう向く 黙秘権の言葉が、
季語ひまわりと呼応し佳句をうみました。

玉山 政美

どんぐりの落ちてきのふの増えてゆく
マスクして小さな神とすれ違ふ
自堕落かもね蓮の骨を見ている
喋りだすバセリ真冬の海が見え
黒潮となつて臙に至りけり
猿に夢全部食わせて卒業す
おもいで鉄棒に降るから緑雨
風薫る泣いてるなんてもつたいない
梟の夜お針箱あけるまじ
オルガンを踏んで白鳥座の汀

山中	とみ子	133	8
山中	葛子	133	8
小野	功	134	4
重田	忠雄	134	5
岡田	淑子	134	6
小多田	文子	134	7
武田	和郎	135	11
千葉	智司	135	12
小野	功	135	12
浜岡	紀子	132	2
森	孝子	132	3
田村	隆雄	132	4
山崎	政江	132	4
秋尾	敏	133	8
東	國人	133	8
塩野	谷 仁	134	4
川上	典子	135	10
田沼	美智子	135	10
清水	伶	135	11

津田沼研究句会報告

●第三三四回（令和二年七月十四日）

通信句会 徳吉洋二郎 担当

空き缶を宿敵のごと蹴って夏 池田 博臣
消灯九時佳い夢見よう麦の秋 吉野 精
コロナにはコロナの掟桐の花 股野 久子
百鬼夜行ねんねんころり合歓の花 なかもと淑子
深夜ラジオ梅雨入りの合はず周波数 星野 一恵
バスワードまた殖え泰山木の花 並木 邑人
枇杷の種南の島に火縄銃 金子 未完
逢魔が時ジシユクジシユクと蛙鳴く 徳吉洋二郎
ステイホーム小道にずらり土竜塚 高木 一恵
塾居せば身の丈縮むアマリリス 村上 澄子
水無月へ離れて並ぶ免許返納 伊与田すみ
紫陽花の果はあやしい風溜まり 横須賀洋子

青葉研究句会報告

●第一〇四回（令和二年四月二十三日）

通信句会 矢野 忠男 担当

菜の花は蝶に人間は窮鼠と化す 徳吉洋二郎
舞い上がり易き椿から墮ちる 長濱 聰子
柿若葉齒間ブラシの朝が来た 細根 栞
空間に浮かべておけば春がゆく 小林 実
いつの間に脳に隙間や五月闇 鈴木まんぼう
間主体性を超えてタンポポです 松崎あきら
夏めきし2DKという間 矢野 忠男
春疫病満ち来る潮の夜目に見え 越野 雄治
中止の野遊び家中がなんでも屋 石井紀美子
包丁のすき間の光春筍 森井美恵子
間一髪露地真つ二つ初つばめ 池田 博臣
衣を脱ぐ好機コロナ化する時間 並木 邑人

人間は薄野呂間抜け木瓜の花 細野 一敏
隙間より風評流れ春の果 山崎 幸子
四月来て季節の間見ていたり 長井 寛
間抜け面これで通して遅桜 三須 民恵

●第一〇五回（令和二年五月二十八日）

通信句会 矢野 忠男 担当

しずかさの水音を結ぶ濃紫陽花 加藤 法子
結の田を見つけられずに鯛烏賊 三須 民恵
命名は結月となるや風薫る 森井美恵子
結跏趺坐ああ蟬時雨せみしぐれ 細根 栞
詩に結ぶ紫陽花の愛雨の藍 石井紀美子
柗酒の塩の結晶光秀忌 池田 博臣
転びキリシタン金雀枝の夕明かり 越野 雄治
磐境にふいに雲雀の急降下 小林 実
一強は鬱結ひとも家蠅も 並木 邑人
帰結まだコロナシヨックの水中花 細野 一敏
堂縁に結跏趺坐して青田風 鈴木まんぼう
お文庫に結んでみせる単帯 矢野 忠男
徒勞組む三四郎池の蛇蛙 徳吉洋二郎
満々の田水をよぎるほととぎす 長井 寛
薄れゆく虹の残像眼裏に 山崎 幸子

●第一〇六回（令和二年六月二十五日）

通信句会 矢野 忠男 担当

点滴を吊り泳ぐ病棟の迷路 長濱 聰子
フロイトの言葉は知らず心太 小林 実
行水や爪立ちをすする野球帽 徳吉洋二郎
青鷺のぎやていぎやてい波羅揭諦 細根 栞
蓮開花聞いた聞かぬと里鴉 矢野 忠男
白靴のうしろ白靴のろしかな 池田 博臣

柏研究句会報告

●第九十三回（令和二年五月）

通信句会 高橋 宗史 担当

市松のリモート画面額の花 森井美恵子
瞑目の夫の景色のサングラス 石井紀美子
原色の海牛連れし黄雀風 鈴木まんぼう
トマト熟れいよいよ曲がる百日紅 越野 雄治
夏蝶乱舞今日もコロナの死亡記事 細野 一敏
梅雨しとど柄杓の腕恋の腕 三須 民恵
コロナ禍の町クレーンが吊り上げる 加藤 法子
子育てはギャンブルの域走り梅雨 並木 邑人
閑かさの重なる水面蛙跳ぶ 長井 寛
紫陽花やどこかに君は居るらしき 山崎 幸子

柏研究句会報告

●第九十三回（令和二年五月）

通信句会 高橋 宗史 担当

はつなつの風心地よく父子マラソン 井上けい子
夏樺ハグすることをとめらはず 岡田 春人
密となる饒舌となる躑躅繚乱 川上 典子
前向きな部屋に片付けるアマリリス 木之下みゆき
小満のひめくり放し鶏無心 小林 俊子
恍惚の眼ご遣せし蛇の皮 小張 直子
人類のリセットなりや亀の鳴く 佐藤 鈴子
自粛とは仮設実験花は葉に 椎名 鳳人
幕間に尾を切り落とす瑠璃とかげ 下村 洋子
チュエリッップ生徒のいない小学校 高橋 宗史
閉じこもるマスクの目玉変化球 高橋 宗史
ごうごうと芽の出る音を聞く静寂 長井 寛
今のことこれからのこと明け易し 中里 結
幕末は世の常あすの氷雨かな 並木 邑人
アニメ似の少女竹む淡き首夏 野口 京子
故郷は日に日に遠く竹落葉 橋本志津子
木は唄ひ石はハミング山笑ふ 藤好 良

●第九十四回(令和二年六月)

通信句会 高橋 宗史 担当

水の流れば透き通つて居り太宰の忌 井上けい子
 木下蘭土の匂いに包まれる 岡田 春人
 アメンボの社会的距離ときに密 川上 典子
 語り尽くせぬ舞台裏木下蘭 木之下みゆき
 十葉や毅然と自肅守り抜く 小林 俊子
 退屈の昇りつめたる立葵 小張 直子
 出不精やおやつ代わりのブチトマト 佐藤 鈴子
 葬ること叶わず夕立地を叩く 椎名 鳳人
 桑の実は在りし日の純粹概念 下村 洋子
 どくだみの昨日愛せしを斬り落とす 高橋 宗史
 六月や花嫁ふつくら真珠色 栃木 きよ
 白夜きて人は狐になりけり 長井 寛
 吊り橋を春の疫病と渡りけり 並木 邑人
 シヨパンからシューベルトまで薔薇の夢 野口 京子
 ゆつくりと夕闇が来て月見草 橋本志津子
 万緑の色の外なるステイホーム 藤好 良

●第九十五回(令和二年七月十一日)

司会 長井 寛

川の水澄みて昏きや太宰の忌 井上けい子
 ぱつぱりと紫陽花を剪る作業員 岡田 春人
 一人つきりはめつぼう苦手凌霄花 川上 典子
 目を凝らしてもほうたるは皆他人 木之下みゆき
 実篤の南瓜は黙に鎮座する 小張 直子
 七月やコロナひたひた姿変へ 佐藤 鈴子
 球児みな宙を見ている日の盛り 椎名 鳳人
 盆の花活けて野の音風の音 下村 洋子
 ムラサキ露草隣家は消えて方丈記 高橋 宗史
 翡翠の水晶になるその一瞬 長井 寛

刃を入れし骨の手応へ初鯉 中里 結
 雲晚夏金の一手に勝負あり 野口 京子
 翡翠の弾丸刺さる川面かな 藤好 良

君津研究句会報告

(於：君津市生涯学習交流センター)

●第四回(令和二年七月二日)

司会 長濱 聰子

いい人で片付けられて端居せり 加藤 法子
 蚊帳という森に安眠したる頃 並木 邑人
 おぼろげな昭和押し出す心太 泉 志眞子
 夕焼けをぐちゃぐちゃにして泣き歩く 鈴木 美幸
 昭和史に武器持つ女七変化 村田 満枝
 持ち時間たつぷりとあり蝸牛 徳吉洋二郎
 たまゆらのいのち咲き切る花水 長濱 聰子
 沈黙は男の美学夏燕 細野 一敏
 コロナの死お別れできぬ沙羅の花 金澤 恵子
 転がつて夜を広げる枇杷の種 石井紀美子
 桑の実の記憶数多のかすり傷 前田 孝子
 ぶち壊す想いの品や春愁 羽矢 眞人
 外出を躊躇しているかたつむり 森 孝子
 ペガサスの翼持ちたい夏岬 山田たかし
 緑陰を選んで早足一万歩 古賀 壽昭
 炊飯のスイッチ押すや二重虹 小澤 富子
 でで虫の径一寸の志 馬淵 津枝
 真紅の傘へ押し寄せてくる青田波 越野 雄治

充実の君津研究句会

四月から始める予定であった君津研究句会
 がやつと七月二日に開催できた。並木会長・
 徳吉幹事長・越野幹事の出席を得て参加者は
 十七名(一名欠席)。コロナ禍の為、当初の

三句持寄りを事前投句に切替えての句会は、
 二時間弱の会場使用制限のなか、其々の結社
 や句会を超えての連衆が輪になった尊い時間
 であった。(石井紀美子記)

ひろば

■市原市俳句大会

七月五日、五井会館に「鷹」同人岩永佐保
 氏を招聘して開催。これは四月の春の大会が
 コロナ禍により延期されたもの。兼題の部は
 県内外から五二五句、当日の席題句会は四十
 四名の出席を以て実施した。(並木邑人記)

☆兼題の部/長閑・地・雑詠三句一組

市原市長賞 鈴木 喬二

摘み終へて風の音聴く蔵山 松本 正子

市原市議長賞 のどけしや時刻表なき渡し舟 三宅 文子

市原市教育長賞 人に会ふ春愁の眉描きたして

☆席題の部/打水・夏燕 市原市長賞 小澤 光世

水打つて一番星を迎へけり 代田 雅文

市原市俳句協会賞 水打つて帰国の吾子をつばかり 長濱 聰子

市原市議長賞 屋上のわたしは帆船夏つばめ 木村 傘休

市原市教育長賞 筑波嶺の風と化した夏燕

秋尾敏 前会長 現代俳句協会賞受賞



第75回現代俳句協会賞は、前千葉県現代俳句協会会長（現顧問）秋尾敏氏の句集「ふりみだす」に決定した。

秋尾敏氏は昭和25年埼玉県吉川町（現、吉川市）生れ。実父河合凱夫急逝により「軸俳句会」主宰を継承。現代俳句協会副会長、全国俳誌協会会長、野田市俳句連盟会長などを歴任。平成三年には「現代俳句協会評論賞」を受賞。句集に、『私の行方』『納まらぬ』『ア・ラ・カルト』『悪の種』。評論に『子規の近代』『虚子と「ホトトギス」』。俳句図書館鳴弦文庫館長。

図書紹介

■『現代俳句を語る』 遊牧俳句会
令和二年五月三十一日刊 遊牧社
創刊十周年記念に『現代俳句を歩く』
創刊百号記念に『現代俳句を探る』
創刊二十周年記念に『現代俳句を語る』
をそれぞれ上梓。遊牧代表 塩野谷仁氏の「序にかえて」以下、従来の「遠交近交」「現代俳句雑感」「好句を探る」「遊牧の一句」に加え、「遊牧秀句合評」を編入。

掲示板

〈会員・会友異動〉

● 逝去（会員） 関根信三、北村妍二

● 退会（会員） 口村洋子、黒川秀夫
（会友） 金田めぐみ

● 新会員

青野 友香（会員） 神野紗希紹介

正山 小種（会員） 神野紗希紹介

加賀谷秀男（会員） 池田博臣紹介

● 会員から会友に

松崎あきら、たけなか華那

〈令和二年度臨時幹事会〉

日時 令和二年六月二十三日（火） 十三時より

場所 船橋市勤労市民センター

議題

- 一、令和二年度総会・四十周年記念大会および春の吟行会中止の経緯―各委員長より報告
- 二、秋の吟行会について
- 三、令和三年度総会・俳句大会について
- 四、四十周年俳句大会報告
- 五、会報一三八号について
- 六、現代俳句協会本部動向
- 七、各研究会活動報告
- 八、その他
 - ① 令和二年下期～三年上期 業務スケジュール
 - ② 会員・会友動向
 - ③ 次回幹事会（八月二十五日（火））

□ 事務局・編集部だより □

● 新型コロナウイルスの流行さえなければ、今頃は二度目の東京五輪で沸き立っているところで、一つの疫病が、こんなにも呆気なく、世界を変えてしまふとは思えない事でした。疫病はあらゆる所に巨大な影を落とし、半面、立ち止まり考える時間を与えてもいます。そんなコロナ禍の中、『千葉県現代俳句集成二〇二〇』へのご感想を始め、力作の「諸家近詠」「感銘句」「句評」など沢山の原稿をお寄せ頂き、心より感謝いたします。皆様からのお力添えが何よりの励みです。なかなか終息しそうにないコロナ禍中ですが、当協会では、感染予防対策を講じた「秋の吟行会」や「令和三年度俳句大会」などの行事が企画されています。是非ご参加ください。ご一緒に楽しみましょう。皆様の更なるご健吟をお祈りしております。

現代俳句千葉 第一三八号
令和二年九月一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会
会長 並木 邑人

現代俳句千葉編集部
〒278-0037 野田市野田
六七七-11A 二一五
木之下みゆき

千葉県現代俳句協会事務局
〒263-0043 千葉市稲毛区小仲台
七八二-八八-10
羽村美和子

TEL・FAX 〇四三-二五六一六五八四